

# CHEN Que's Mental Picture Seen through his Poems on Illness

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/925">http://hdl.handle.net/2297/925</a>

## 陳確の心象風景

——その病気の詩をめぐって——

久富木 成大

CHEN Que's Mental Picture Seen through his Poems on Illness

Shigehiro KUBUKI

はじめに

一、傷寒から疸へ

二、瘡

三、手足不随

四、死後の世界

おわりに

注

はじめに

陳確は字（あざな）を乾初、又は道非ともいう。明の神宗の万曆三十二年（西暦一六〇四年）に、今の浙江省海寧市に生まれ、清の聖祖の康熙十六年（西暦一六七七年）、七十四歳で世を去った。

生家は、その祖父以来学者として、その地方では名の知られた名門であった。しかし家は貧しく、師にもつけず、陳確の三人の兄たちのうち、長兄と次兄に学問を習った。二十歳をすぎてから、しばしば科挙を受けたが合格できなかった。

四十歳の時、劉宗周に師事した。劉宗周については、『明史』本伝に以下のごとくいう。「字、啓東、浙江山陰の人万曆辛丑の進士、官は左都御史に至る。乙酉六月、食せずして死す。学者念台先生と称す」と。

この前後の陳確のことについては、後に従曾孫、陳琛孝が陳確の詩集を編んだとき、その巻頭にかかげた「乾初先生詩集小伝」に以下のごとくいう。「鼎革に値うの後、遂に挙子の業を棄て、門を閉じ、母に事え、躬（みづか）ら耕やし、道を楽しむ」と。

ここである鼎革は明王朝が亡び、清王朝に天下がとってかわられたことをいう。憤りを発して、同門の親友、祝開美は縊死し、師、劉宗周は食せずして卒して、明王朝に殉じたのである。こうした状況のもと、科挙を目ざすことは自ら廃した。しかし老母のことを考えて生命を絶つことは出来なかった。そこで帰農し、老母に仕えつつ晴耕雨読の生活に入った。陳確の四十二歳から四十三歳にかけての頃のことである。

陳確は儒学を修めた。その学問は朱子学には強く反発し、どちらかといえば実践躬行をむねとする明の王陽明のとなえた陽明学に近いものであった。その成果は、著書としてまとめられており『大学弁』・『誓言』・『葬書』等がある。

清朝末期、陳確の死後一七七年を経て、『葬書』が刊行された。陳

確は葬礼に関心が深く、葬礼実施のための結社にも参加し、中心的役割も果たした。この書には彼のそうした実践活動が反映されており、社会への影響もそのために大きかったであろう。更に、陳確の死後二百年目に『乾初先生文鈔』一卷が、「海昌叢書」に収入して刊行された。

人民共和国成立後、陳確の学問には唯物論的要素、ないしはその萌芽があるとして評価され、一九五八年に「中国唯物主義思想選集」が編まれることになり、そのなかの一冊として『陳確哲学選集』が、科学出版社から出版された。さらに類似の企画のもと、収録著作を増加し、一九七九年には『陳確集』上下二冊が、中華書局から出版された。これは、ほぼ「全集」と称するに足る、充実した内容を備えている。

陳確は生涯、大病を何度も患っている。とりわけ晩年の十五年間は寝たきりになり、門を閉じて外出することが無かったという。しかし気力は衰えることはなかったようである。劉宗周の下での門下生として時を同じくした黄宗羲は、陳確の没後請われて墓誌銘を書き、その中で「余、丙午に之を訪うも、病中なお危坐し、劇談す」（『南雷文定』後集卷三）と、その元氣さにふれている。

陳確は中国の知識人がおおむねそうであるように、詩にも巧みであった。前述の陳塚孝の「小伝」にはまたその詩風について、「古詩は陶（淵明）の神韻、近体は杜（甫）の謹嚴に法り、而して（李）太白・香山（居士）白樂天」に出入す。之を要するに、俯仰淋漓、一歌一哭、則ち自ら先生の詩たるなり」と述べている。

小稿では、全十二巻にもおよぶ多くの詩のなかから病氣にかかわ

る詩を選び、そのなかのまた若干について、種々に検討し、陳確の胸中に去来した思いをめぐって、いささかの考察を加えてみたい。

## 一、傷寒から痘へ

人間は健康でばかりあることは難しい。健康を損なうことは誰しも欲しないが、時としてそれを避けることはできないものである。自らの病氣について、陳確は以下のように述べ、うたっている。

### 病吟 井びに序

確、自らおもへらく、事を簡にし、食を節し心情を調切するは、道に幾（ちか）きの方に非ずといへども、病ひを却けるの術たらんことに庶（ちか）し、と。

庚寅の秋の傷寒より後、五、六年來、遂に小康に稱ふ。意はざるに、今年十月初めの五、六日、小腹の下に一瘡おこる。纔かに粟子の如し。固より心に之を疑ふも、亦た甚だしくは以て意と爲さず。何ごととも无きも、初めの八、九日に至り、遂に大いに困しみ、枕に伏して起つ能はず、連熱、八の日夜、食欲、一も進まず方に依り之を治し、其の熱ようやく解すといへども、疲困すでに甚だし。

方論に云ふ、「病はこれを膏梁より得る」と、又云ふ「七情、鬱を火（さかん）にす」と、亦た云ふ「心火、腎經に流入す」と。此の三言は、皆、以て陳子の心を伏（しりぞける）に足らず。已にして曰はく、「惟だ其れ伏けざるのみならず、痘を致す所以なり」と。因りて篇に著はし、以て、後過を愆（つつし）

むと、しか云ふのみ。

○

身を守るは洵（まこと）に孝たるも、戒懼、勤むること須臾。

賢者はそれ大なるを志すも、

詎爲（なんすれ）ぞ、此れ賤軀、

陳子、形上に昧（くら）く、

この尺寸の膚を愛す。

口腹、敢へて縦（ほしいまま）にせず、

四體、勉（つかれ）しめず。

自ら以て吾が天を全くするに、

何ぞ知らん、不虞を患ふを。

不虞、あに通言ならんや、

方論、良（まこと）に誣（いつはり）にあらず。

積愆、自ら省みず、

而して乃はち成書を訾（そし）り、

疾あること、固より懼るるに足るも、

疾なきこと、未だ愉しむに足らず。

借問す、五六年、

碌碌として奚ぞ圖るところか。

吾は懷く百世の憂へを、安くんぞ能く、須（もち）ふる所を忽

（ゆるがせ）にせんや。

（病吟并序

確自以簡事節食、調切心情、雖非幾道之方、庶爲却病之術、自  
庚富傷寒後、五六年來、遂稱小康、不意今年十月初五六、小腹

下起一瘡、纔如粟子、固心疑之、亦不甚以爲意、无何、至初八  
九、遂大困、伏枕不能起、連熱八日夜、食飲不一進、雖依方治  
之、其熱漸解、而疲困已甚矣、方論云病得之膏粱、又云七情火  
鬱、亦云心火流入腎經、此三言者、皆不足以伏陳子之心、已而  
曰、惟其不伏、所以致疽、因著篇、以誌後過云爾。

○

守身洵爲孝、戒懼勤須臾。

賢者志其大、詎爲此賤軀。

陳子昧形上、愛茲尺寸膚。

口腹不敢縱、四體弗使勉。

自以全吾天、何知患不虞。

不虞豈通言、方論良非誣。

積愆自弗省、而乃訾成書、有疾固足懼、无疾未足偷。

借問五六年、碌碌奚所圖。

吾懷百世憂、安能忽所須。

Ⅱ『乾初先生詩集』卷二

序文に明らかなように、陳確は「節食」と「心情のコントロール」こそが病氣を退けるのに相当の力を発揮し、この二つの心がけによって、自らは病氣と無縁の日々をすごしうるのであると、信じ込んでいたようである。これは陳確が庚寅、即ち清初の順治七年（西暦一六五〇年）、四十六歳の時の秋に傷寒（Ⅱ腸チフス）にかかり、それを克服し、自愛につとめながらの、その後の五、六年間の小康の日々の中で得られた自信に由来するものに外ならない。

しかし、この自信は手痛い反撃を受けた。下腹部に生じた、粟粒

のような小さなで、き、もの、がもとで高熱を發した。八日間も熱が下がらず、服薬により、ようやく熱は下がったが、それ以後の体力の衰えに苦しまなければならなかった。この時の小さなで、き、ものは、結局、悪性の腫れ物、すなわち、「疽」の初期症状であったのである。

この苦い体験を、陳確は「医方」<sup>①</sup>の述べるところの、病氣の原因となる三つのもの、即ち「膏梁」<sup>②</sup>・「七情」<sup>③</sup>・「心火」<sup>④</sup>への備えが不十分であったことによるのであると、位置づけし、反省した。

大事を志す人間なら、又は賢者ならば、自ら心して「膏梁」・「七情」・「心火」を退け、コントロールして押さえているはずである。

陳確も傷寒を患って以来、そのことを実行できている心づもりであった。その甘さ、あるいは不徹底さが、言葉をかえれば、結局のところ「医方」の述べる三つの病因が、陳確のこのたびの「疽」をもたらし、体をいためたのだということになる。

「疽」も癒え、危うく一命をとりとめたものの、自らの迂闊さをこのまま放置するに忍びず、深い反省の念をこめてその想いを、『病吟』と題し、序文を付して詩にまとめた。

五言古詩。脚韻は上平七虞の一韻到底格。韻却是與・軀・膚・劬・虞・誣・愉・圖・須で、これらの押韻の箇所がまた段落を示している。

第一段では、身を守ること、即ち健康の保持が「孝」の実践であるとする考えを、陳確は述べている。それだけに、かえって義務ないしは重荷になるからであろうか、それを実行することになると、いくら自ら戒めても、長つづきはしないと、述懐している。

第二段。賢者は、孝の志も大きく、しかも、それを実行すること

によって身体も立派であるのであろう。それに比べて、私の身体は何と貧弱なことか。

第三段。陳確は自らを形（而）上のことには昧（くら）いという。そのために、健康についての注意も精神のことには及ばず、目に見える体の表面のことにしか行き届かないのであるという。

第四段。前段をうけて自分の健康への気くばりは、せいぜい食事をとりすぎないことや、肉体の疲れすぎになることを避けるぐらいにしか行き届かないことを述べる。

第五段。自分では、天、つまり運命にひたすら従順な人生を送っている。それがどうして「不虞」、即ち、思いがけない不幸、例えばこのたびの大病のようなものが、突然わが身にふりかかって来たりすることになるのか、と陳確は疑問を呈する。

第六段。それにしても「不虞」などという言葉は、必らずしも言葉としては明白な意味を持っていない。それだけに信用をおきがたい<sup>⑤</sup>。それに反して、医学の教えには何一つ誣（いつわり）は無い。ここで陳確は医学に対しての全幅の信頼の念を表白している。

第七段。ここで陳確は日頃の生活を反省する。そして健康と病氣についての感想を総括して述べている。

先ず、陳確は自らの毎日の生活に「積愆」とでも表現されるようなあり方が有るという。何かにつけて、健康を保持するという点で過誤を犯し、それらが積み積っているというわけである。それにもかかわらず、陳確自身はそのことを気にもせず、反省することもなく、あまつさえ医書の述べる健康についての教えを、訾（そし）りさえするというありさまであった。

こうした日々をふりかえり、陳確は「病氣にかかっているということ、当然、懼るるに足ることである。しかしながら、病氣が無く健康であったところで、それが愉しみに満ちたことであるとも言えない」という。このことには、病氣の無い健康な時こそ、そのことをいたずらに楽しむのではなく、細心に健康への心配りを十分にしなければならぬという陳確の実体験にもとづく反省がこめられているのだと見たい。この考えをうけて、以下に陳確はいう。

第八段。傷寒（＝腸チブス）が癒え、小康の日々をすごした五く六年はどうだったか。何か自分は健康のために図るところがあつたか？健康な時にこそ、心をくだいて、一ときといえども心をゆるめることなく、病氣について真剣に備えなければならない。これは決して愉快なことではないが、真剣にとり組まなければならないことであるのと、陳確は反省を交えて強調する。

第九段。陳確は自らを、底知れず深い憂いを抱いた存在として自覚し、位置づけている。そうして、この憂いこそは、先に言及したとおり、病氣の原因として医書が指摘する「七情」「心火」そのもの、ないしは直ちにそれに転化しうるものと、陳確にはとらえられているのである。

すでに見てきた傷寒の五く六年後に突如おこった「疽」こそは、うかつにもその処理を見のがして来つづけた自らの憂鬱の数々、そして、それに深くかかわっているところの「七情」「心火」などこそが、その原因であると陳確は述べていた。

このたびの病氣、「疽」についての、いうなれば反省の詩、あるいは自他をも対象とした戒めの詩としてのこの「病吟」を、陳確は「方

論にのべる病因を避けるための諸々の手だてを、どうして無視することが出来ようか」ということばで結んでいる。医書の述べる健康法に、忠実に従いたいという決意を、陳確はここに強調しているのであろうと、見るべきであろう。

病氣の起こる原因については、「先民の詩」のなかで、陳確はまた以下のようにもいう。

#### 先民の詩

先民に遺訓あり、  
病ひを養ふには心の安きを貴べ、と、  
斯（こ）の言、固より達なりと云ふも、

また未だ全からざる有るを恐る。

身心はもと一體、

苦樂まさに相關し、

身苦しめば心もまた苦しみ、

安んぞ常に泰然たるを得んや。

惟だよく擾亂せず、

また妄（みだり）に憂煎せず。

詎（なん）ぞ能く至神に役し、

營營として世縁を逐げん。

#### （先民詩）

先民有遺訓、養病貴心安、斯言固云達、亦恐有未全。

身心本一體、苦樂正相關、身苦心亦苦、安得常泰然。

惟能不擾亂、

亦不妄憂煎。

詎能役至神、  
營營逐世緣。

## Ⅱ『乾初先生詩集』卷三

この詩は、陳確の詩集を編んだ陳琛孝<sup>⑥</sup>によって丙申（西暦一六五八年）の年に編入されている。即ち陳確五十四歳の時に作られた詩ということになる。前引の「病吟」が庚寅（西暦一六五〇年）から五〇六年後のことをうたっていることからすると、この詩は、その二〇三年後の作品ということになる。この二つの詩を、ほぼ同時のころの作品であるといってもよいであろう。

五言古詩。脚韻は下平一先。韻脚は全・然・煎・縁である。

初めにかかげた「病吟」の詩では、「心」の安定が健康にいかにか大切であるかということが強調されていた。この「先民詩」では、この「心」を重んじるという古人の教えだけでは完全ではないという。それは、これが、「心」を重視するあまり、身体の方を忘れがちとなり、身心が一体でなければならないとする認識を欠くことになるからに外ならない。

このように、心と身体とを共にいたわり、両方を健全な状態に保つことに努めなければならないのであり、こうした心身の健全な状態を称して、陳確は「泰然」と表現する。

この「泰然」たる状況を心身に実現するためには、身体を社会の「擾醬」の局面からつとめて遠ざけ、心情はみだりに「憂煎」、つまり、憂えかつ痛めつけるということをしないように意を用いなければならぬという。

このようにして、心身を養っておかないことには、「至神」、つま

り天に十分に仕え、なおかつ「世縁」、即ち世の中の人々との繋がりを全うできないであろうと、陳確はこの詩をむすぶ。

陳確はこのように、心身の一体化した好調な状況の実現を健康の条件、即ち同時に、その反対の状況の実現を病氣の原因と見なしてもいたのである。

## 二、瘡

これまで陳確の患った病氣のうち「傷寒」と「疽」、なかでも後者についてやや詳しく見てきた。以下に、このほかに、彼をしばしば苦しめた「瘡（ぎゃく）」についてながめて見ることにする。

ここでは陳確の詩を読むことに先立って、年譜の述べる以下の文章に目をおしておきたい。その後で、陳確の詩にたちもどり、読んでみることにする。

五月廿五の夕べ、盜ありて先生の室に入り、筐篋（きょうき）（きようき）ともに罄（つき）る。先生、七鐵の尺に中（あた）り、流血、體を被ひ、既にして瘡おこる。

六月初七の晨（あした）、忽ち暈（めまい）し、地に仆（たふ）れ、時を移して始めて甦（よみがへ）る。（五月廿五之夕、有盜入先生室、筐篋俱罄、先生中七鐵尺、流血被體、既而瘡作、六月初七之晨、忽暈仆於地、移時始甦。〓吳騫『陳乾初先生年譜』清、順治三年丙戌）

「年譜」のこの文章は、以下に述べる陳確の二首の詩に依拠しているところが大きいと思われる。それを順を追って見ていきたい。

盜に遇ふ編年詩丙戌に入る

病に困しみ、適（たまたま）偃臥するに、乃はち奴輩の及ぶことを爲す。

暑月、赤身を愁へしめ、  
寒家、徒壁を愧じるに、  
重ねて相い枉顧するを煩はせば、  
宜しく爾に薄責を施すべし。

犢拳、錯亂して投じ、

雜ふるに九の鐵尺を以てす。

左股、一創を受け、

流血、階石に滿つ。

竟夜、繫拘せられ、

押搜、纖悉に及ぶ。

一瓶は女の珥、

二篋は叔の擇ぶところなり。

殷勤に相い付託すれば、死を忍んで争い力（つと）むべきも、

輕磴として各各指し與へ、

乃はち太（はなはだ）柔直なることなからんや、

物を失ふこと奚ぞ悲しむにたらん、

膚を傷つけること、良（まこと）に惜しむべし。

孟云ふ、必ず自ら辱じん、

平生の失を檢點すれば、と。

造物あに意なからんや、

妻女、遶（とりまき）て泣く勿れ、

但だ看（き）く、西鄰の兒、哀哀として楚澤に吟ずるを。

本注：楊連城の次子、  
盜を畏れて溺死す。

（遇盜編年詩入丙戌

病困通偃臥、乃爲奴輩及、暑月愁赤身、寒家愧徒壁、重煩枉顧、宜爾施薄責。

犢拳錯亂投、雜以九鐵尺、左股受一創、流血滿階石。

竟夜被繫拘、押搜及纖悉。

一瓶女之珥、二篋叔所擇。

殷勤相付託、忍死爭宜力、輕磴各指與、無乃太柔直、失物奚足

悲、傷膚良可惜。

孟云必自辱、檢點平生失。

造物豈無意、妻女勿遶泣、但看西鄰兒、哀哀吟楚澤。

盜溺死

本注：楊連城次子、畏

Ⅱ『乾初先生詩集』卷二

五言古詩。脚韻は入声十一陌。韻脚の文字は責・尺・石・擇・惜・

澤。又、換韻し、入声四質。韻脚は悉・失。

詩では一般に脚韻は平声を用いることが多い。一方、陳確のこの詩には仄韻が用いられている。それなりの効果が期待されたことと思われる。即ち、仄韻の持つ切迫したひびきが、韻脚として働き、詩の重苦しく悲惨な内容と合致しているところから、このように考えられるのである。

前述のごとく陳確の詩集を編んだ従曾孫陳琛孝は、右に引いたこの詩を、「丙戌」の年に編入しているが、これは清の世祖の順治三年、西暦一六四六年、陳確四十三歳の時にあたる。

いわゆる明末清初といわれるこの時代には、政治経済の不安定な



状況の反映の一つとして、盗賊の横行という現象が目立った。ここに引いたもの以外にも、陳確は盗賊についての詩も幾首か残している。<sup>⑩</sup>

例によつて、押韻のところが意味上の段落の目安となる。段落を追いつながら、意味をたどつてみたい。

陳確がたまたま病臥していた夜、盗賊が押し入つてきた。病気で、暑さと貧乏に苦しんでいるところを、「枉（＝ま）げて顧（＝＝おい）で下さつた云々」と盗賊の侵入を茶化して表現していることには注目したい。苦しみの上に、更なる苦しさと悲慘との到来したことを、あくまで客観視して、余裕のあるところを示している。しかし、大いに無理をしていると見たい。（以上第一段）

盗賊は鋭い牛角を投げつけ、それに雑えて、九本の鉄の棒も投げつけた。（以上第二段）

盗賊の投げた鉄棒により、陳確の左股が傷つけられ、血がしたたつて石段に溜つた。（以上第三段）

陳確は一晚中縛られ、家中すみずみまで家捜しされた。盗まれたもののうち、一瓶は女の珥（みみだま）、二箱は叔父の沢んだ品物の入つたものであつた。（以上第四・五段）

「盗られたものはいずれも、皆から慇懃に付託されたもの。だから死力を尽して争い、守るべきものを。自分は、易々と盗賊に指示して、それらを与えてしまつたよ。あまりに安易で、馬鹿正直でありすぎたのではないか。だが、よく考えてみると、物を失つたことは真に悲しむべきことではない。親から授けられた膚を傷つけられたことこそ、まことに惜しみ悲しむべきではないか」と陳確はいう。

#### （以上第六段）

孟子のいうところによれば、「必らず自分には辱ずべきところがあるはずだ。平生の欠点をよく点検してみると」と。今度の盗賊のもたらした災難も、例えば造物主の何かの配慮がこめられた出来事かも知れない。こうした考えをふまえて、陳確はいう。「妻よ、女たちよ、いたずらに泣かないでくれ。ただし、西隣りの息子さんが盗賊を恐れて逃げるとき溺死した。あの人の悲しい泣声が聞こえてくるようだ」と。まことに痛ましいことだ。この人の死のことを思うとき、陳確には、目前の泣き叫ぶ家族、自分の負傷、造物主の配慮さえも空しく、悲しいものに思われてならないのである。（以上第七・八段）

盗賊に入られ、物心ともに傷手を負つた陳確が、孝の立場からすると、身体を傷つけられたことをこの上もなく措きしんでいるさまが強調されている。しかし、一方でまた造物主の意図を信じようとする。

この時、陳確の思いはこの盗賊の難を恐れて逃げるとき溺死したという隣家の次男を悼む気持がわき上がるのをいかんともしがたい。隣人のこの死の前では、もはや「孝」も「造物主」も無に帰してしまふ。

ここには、陳確の社会観・人生観・世界観をこえて、あるいはかえつてそれらを支えている「死」の問題が、即ちその重さが提起されてもいるのだと見るべきであらう。しかし今は措いて、問題を本来の視点である陳確の病氣のことに移したい。

すでに見てきたように、陳確の年譜の編者、呉騫の述べるところでは、「先生、七の鉄尺に中（あた）り、流血体を被い、既にして瘡おこる。六月初七の晨（よあけ）、忽ちにして暈（めまい）して地に（たお）れ、時を移して始めて甦る」といつていた。

これによると、盗賊から傷を負われたとき、「既にして瘡おこる」と述べられているところからして、「遇盜」の詩の書き出しにおける「病いに困しみ、適ま偃臥す」の、「病」は、瘡であったのだと解しておいてよいであろう。

後にもふれるとおり、陳確は早くから、「瘡」<sup>⑬</sup>という病気にはしばしば苦しめられていたらしい。

このたびの瘡、即ちマラリアの発作は、盗賊にあう前からすでに起っていたものの如くである。その後の経過は年譜にいうとおりであるが、より詳細には、以下の詩に、その症状とともに述べられている。

#### 六月初七の辰巳の時

六月初七辰巳の時、

陳子、體倦にして忽ち持せず、

心迷、頭暈、堂隈に例れ、

耳聾、眼黒、百（おほよそ）<sup>⑭</sup>知あらず。

妻兒、他に往き、一も隨ふなく、

誰か其れ旁に在り、我がために喚ばんや。

須臾も醒めず。魂すでに離れ、

始めて悟る、死味は誠に斯の如くかと。

斯の時、即ち死すれば、胡ぞ便宜ならんや。

體、疾痛なく、口に呢（こえ）なく、速かに往けば、兒女の啼くを聞かず、安くにか逝けば、冤魂の咎を受けざらんや、

世亂れ、洵洵として一に之を聴く、

長歸、冥溟、樂しみいくばくぞ。

少頃、胃くつがへり、嘔（は）くこと淋漓たり、

三蟲迸り出で、頭尾そろふ、

額汗、微發、流れ漸（つき）るが如し

開眼し、徐ろに能く四肢を運（はこ）び、

匍匐し歸臥するに、夢逶遲たり。

熱減り、瘡やみ、生理かへる。

死に之（いた）りて生き、期するところあらず、

顛趾、出るや否なや、爰、あに欺かんや。

天、いまだ過（つみ）を老頭の皮に饒（ふや）さず、

瘦骨もて再起し、亂危を支ふ。本注：凡そ瘡を病めば、必ず膈に痰す。故に昏み仆る。嘔けば則ち寒と痰と俱に出でて、

病ひ已む。

（六月初七辰巳時

六月初七辰巳時、陳子體倦忽不持、心迷頭暈倒堂隈、耳聾眼黒

百不知。

妻兒他往莫一隨、誰其在旁喚我爲。

須臾不醒魂已離、始悟死味誠如斯。

斯時即死胡便宜。體无疾痛口无呢、速往不聞兒女啼、安逝不受

冤魂咎、世亂洵洵一聽之、長歸冥漠樂何其。

少頃胃泛嘔淋漓、三蟲迸出頭尾齊、額汗微發如流漸、開眼徐能

運四肢、匍匐歸臥夢逶遲。熱減瘡已生理回。之死而生匪所期、顛趾出否爰豈欺。

天未饒過老頭皮、瘦骨再起支亂危。

本注：凡病瘡、必疲弱也、故昏仆。嘔則寒與痰俱出而病已。

『乾初先生詩集』卷四)

すでに見てきたとおり、五月二十五日夜、盜賊のために傷を負い、それを機に、以前から発病していたらしい瘡が悪化し、病熱がすすんだ。盜賊にあつてからは十二日後の六月七日の辰巳の時、即ち夜の八時から十時ごろ、陳確は目がまわり、意識を失つて倒れた。

七言古詩。脚韻は上平四支。韻脚は知・爲・斯・其・遲・欺・危。一韻到底であり、七段に分かれる。

以下に段落をおつて、大意を見ていこう。

六月七日、夜の八時から十時ごろ、陳確は体がだるくなり、立つておれなくなった。意識もうすれ、頭もくらくらして、部屋のおすみ倒れた。昏倒したのである。耳も聞こえなくなり、眼も黒白を見分けられない。(以上第一段)

妻子は外にいて、ここには一人もいない。そばで私に声をかけてくれるものは、誰もいない。(以上第二段)

少しの間も意識を保つことはできず、死というものは、このようなものかと初めて悟つた。(以上第三段)

この時死んでいたらよかつたと思う。死ねば体の病氣も消え去り、苦しみのうめき声も無くなるのだ。しかも、あつという間に死ねば、児女の泣き声を聞かずにすむ。

しかし、死んであの世に行つても、冤魂がさ迷つていて、それらがちょうど現世の盜賊のように咎をふるい、どこへ逃れれば、その

咎をまぬかれることが出来るだろうか。

また、この世は乱れて、人々の争いの声に満ちている。しかし、現世を去つて冥土へ行つたとしても、暗いわびしさの中では、楽しみなどはほとんど無いのではなからうか。(以上第四段)

しばらくして胃がせり上がり、思いきり吐いた。それとともに三蟲<sup>⑮</sup>がはしり出て、三匹がそろつた。それを機に、額からは冷汗が流れ出てしたたりおち、やがて眼が開き、徐々に四肢が動くようになり、匍匐して寝台までたどりつき、あがつて臥し、うとうとと、夢ばかり見つづけた。(以上第五段)

熱が下がり、瘡がやんで、やつと正気にもどつた。こうして、私は一度死んで生きかえつたのだが、この世に何の望みも無い。(将来については)もう一度倒れるかどうか、易で占つてみればよくわかるだろう。易占の指し示すところは、決して過ちは無いのだから。

(以上第六段)

(三蟲は天帝に、私の積悪を告げたであろうが)、天帝はこの老人の皮膚に、あの盜賊に負つた傷以外の罰は加えられなかつた。(この傷つた皮と)瘦せおとろえた骨で、この乱れ危うい世に生きかえり、支えながら生きていこう。(以上第七段)

瘡が高じて意識を失い、昏倒した陳確は、このとき死の世界に一度足をふみ入れたのだと認識している。

しかし、陳確は冥土に大きな期待を持っていないし、そうかといつて、この現世にも望むところは多くは無いのだという。陳確は、現世と冥土とを、あまり変わるところが無いところだとして位置づけている。

この詩の意味の流れからして、自らの蘇生の契機を、三蟲が嘔吐によって体内からはり出たことにあると、道教の信仰にのっとり、陳確は神秘的に歌いあげる。

しかし、陳確の、この瘡という病氣についての彼自身の認識は、詩の流れのなかのそれとは別にあつたのである。その陳確の考えは、この詩の末尾に、陳確自らが注を加えて明示している。

この病氣についての認識は、陳確の場合、もちろん現代医学が解明して伝えるそれとは、同じくしない。ちなみに、現代医学では、以下のようにいう。蚊に寄生した、胞子虫類に属する原生動物、マラリア原虫が蚊の唾液腺の中で養われ、蚊が人を刺した時人間の体内に侵入する。そして血液に入り、赤血球を破壊する。そうすると肝臓がはれ、熱発作をくりかえす、と。そして、この病氣を「マラリア」と呼んでいる。

前述の詩の末尾の本注で、陳確は瘡について説明していることを、すでに我々は知っている。そこに述べられているのは科学的な合理精神からは遠いが、道教の迷信を排し、自らの論理でこの病氣の経過を解明し、分析して、それなりに合理的であり、みごとにものがあるといえよう。彼の性格は、かなり理性的であり、物事を論理的に思考することに慣れた人であるということを感じさせる。

陳確はいう。瘡は、痰が膈（かく）即ち胸と脾との間を塞ぐからである。この時に昏倒をおこす。そしてまた同時に、嘔吐がおこる。これによって、体中の寒（と熱）<sup>⑩</sup>と痰とが出る。こうして塞がつていた膈が通じ、瘡も平治することになる。

このことを、右に引いた詩の表現とあわせ考えると、嘔吐による

痰の除去と発汗とが、寒熱を去り、平治をもたらしたというところと、一致するのである。

陳確はまた、瘡について、以下のように歌う。

#### 間日の瘡

廿年、瘡あらざれば、瘡の害を忘る。

一朝瘡おこり、苦、いかんともするなく、

寒時には、六月に爐を圍まんと思ひ、

熱時には、五更に河に投ぜんと欲す。

連日の瘡、貧ること酷吏の如く、

硃票火籤、踵（きびす）を繼ひて至る。

三日の瘡、優柔なる君の如し、

冤獄久しく滞り、誰が申を理（おさ）めん。

間日の瘡は、稍寛の假なるを覺ゆ。

書に云ふ、連日なる者にしかず、と。吾はむしろ此を取り、彼を取らず、

一日の安を偷（ぬす）み、姑且に聊（やすん）ぜんや。

醫せず、禱らざるも、また截（ととの）はず、

冥坐し常に津（つば）をもつて咽（のど）を漱（すす）ぎ、

兼ねて風寒を避け、食飲を節す、

瘡鬼、瘡鬼、劣と作るに任（まか）す。

#### （間日瘡

廿年不瘡忘瘡害。一朝瘡發苦无奈、寒時六月思圍爐、熱時五更欲投河。

連日瘡如貧酷吏、硃票火籤繼踵至。

三日瘡如優柔君、冤獄久滯誰理申。

間日瘡覺稍寬假、書云若連日者。

吾寧取此不取彼、偷一日安聊姑且。

不醫不禱亦不載、冥坐常將津漱咽、兼避風寒食飲節、瘡鬼瘡鬼任作劣。

## Ⅱ『乾初先生詩集』卷四)

七言古詩。脚韻は上声二一馬。韻脚は者・且のみ。古詩らしく、形式にはほとんど意を用いられていない。古詩らしく地味な詩といえよう。

題目に「間日の瘡」というが、「間日」とは隔日ともいい、一日おきという意味であり、したがって、この詩の題目は「一日おきに起る瘡」という意味を持っている。

例により、内容の大意を段落をおって見てゆきたい。

二十年間、瘡を思わなかったので、瘡の苦しさを忘れていた。ある朝突然、瘡が起こり、その苦しきはどうしようも無い。悪寒が起こると、六月の暑さにもかかわらず、爐を囲みなくなり、熱が出ると、夜明けのうす寒さの中でさえ、河に飛び込みたくなる。(以上第一段)

毎日起こる瘡の苦しきは、まるで酷吏に責めつけられているようで、朱書きの命令書や、緊急の逮捕状が踵を接して発せられ、つきつけられているかのようなのである。(以上第二段)

三日おきに発作の起こる瘡は、優柔不断の君主のようなもの。未決の冤罪に苦しむ人が獄に満ちあふれているのに、誰が裁くのか。一日おきの発作の瘡は、ややゆるやかで、のびのびしているよう

だが、書に云ふ、連日の瘡にはかなわない、と。(以上第三段)

というのも、私はむしろ連日の瘡の激しさを好むのだ。一日おきの瘡は、まるで一日の安楽を盗んで、小さな快楽に安んじているようで、あまりいい心地のものではないからである。(以上第四段)

医者にもかからず、祈禱も受けず、今までできたけれども、これだけでは、あるいは、こうした治療は、瘡に関してはあまり利かないからだ。ひたすら暗所に座して安静にすごし、常に唾液で喉を漱ぐことだ。これに加えて、寒風を避け、飲食を節度あるものとするのがよい。こうして瘡鬼の勢いが自然に衰えるのを待つのみだ。(以上第五段)

ここには陳確の激しい気性が、激しい言葉で、まるで投げつけるように並べられている。押韻など、詩の形式のことなどには、無頓着である。

注目したいのは、末尾の一句。これは、「瘡鬼よ瘡鬼よ、汝、消えて失せろ！」と訳したいところである。脚韻が仄声(入声九屑)であるのも、感情の切迫した、その激しさを、よくあらわしているかのように思われるが、これは意図的には決してなく、巧まらずして自然に生まれた効果であると見たい。

陳確のここに見られる激しい気性は、彼の学問や社会生活の諸方面に色濃く反映されているものと考えてよいであろう。

## 三、手足不随

すでに見てきたごとく、四十代から五十代にかけて、陳確はしばしば「瘡」の発作に見まわられて苦しんだ。以下には、六十歳代の陳

確の病氣について見てゆきたい。

陳確の詩集の編者、陳琛孝は、以下にあげる「藜（あかぎ）の杖」の詩を乙巳の年に編入している。乙巳は、清朝の康熙四年、西暦一六六五年、陳確六十一歳の時ということになる。この詩を作ったころは陳確はまだ元氣であったのだろうか。以下の詩ならびに序の述べるところについて見てゆこう。

藜（あかぎ）の杖并びに序

園に薪を拾ひ、一の藜杖を獲、また玉慧と名づく、俗にこれを觀音蘇といひ、蓋し艸本なり。而して堅樸古駁、絶（はな）はだ靈壽藤に似たり。

僮人その枝を亂斫し、遂に數節を傷つけ、之を道傍に棄てて久し。吾見て之を憐れみ、手自ら脩製す。其れもと高さ丈餘、桷本を去る尺ばかり、二尺ばかりを杪し、また八尺ばかりの長さを得。頭に孔あり、百文を穿つべし。節勢臃腫、邛竹のごとく、皮質鱗皴、尤も鮎背の老人に似たり。宜しく八九十以上の人これを持つべければ、我は未だ及ばざるに似たり。

又題して曰く、此の杖、深山窮谷中、雞皮鶴髮の老人、竹簪簪冠し、寬袖破衲子を穿き、赤脚拖（ひきず）り、深く艸籬に面し、蹢躅として荒林晩照の下に獨行するに須（もち）ふれば、然る後、稱（かな）ふと爲すなり。

○

僮人刈園薪を刈り、良栝、また付せず。斬伐す、一に任意、

失計、安くんぞ挽くべけんや。

菜藜、高さ丈餘、

古榦、常本に異なる。

棄置すれば、あに道（い）ふに足らんや、

風雨久しく剝損せん。

老人その材を奇とし、

一顧して繡綫を生ず。

既に傷つき、摧殘多く、

又恨む、相遇ふこと晚きを。

勉めて留む、未だ毀れざるの節を、

努力して、衰鷲を扶けよ。

（藜杖并序）

拾園薪、獲一藜杖、亦名玉慧、俗謂之觀音蘇、蓋艸本也、而堅樸古駁、絶似靈壽藤、僮人亂斫其枝、遂傷數節、棄之道傍久矣、吾見而憐之、手自脩製、其本高丈餘、去桷本尺許、杪二尺許、還得八尺許長、頭有孔、可穿百文、節勢臃腫如邛竹、皮質鱗皴、尤似鮎背老人、宜八九十以上人持之、我似未及也。

又題曰、此杖須深山窮谷中、雞皮鶴髮老人、竹簪簪冠、穿寬袖破衲子、赤脚拖深面艸籬、蹢躅獨行於荒林晩照之下、然後爲稱也。

○

僮人刈園薪、良栝不復付。斬伐一任意、失計安可挽。菜藜高丈餘、古榦異常本。

棄置豈足道、風雨久剝損。

老人奇其材、一顧生繾綣。

既傷摧殘多、又恨相遇晚。

勉留未毀節、努力扶衰蹇。

『乾初先生詩集』卷三

五言古詩。脚韻は上声十三阮。韻脚は付・挽・本・損・繕・晩・蹇の一韻到底。

中国では古来、藜（あかぎ）の茎で作った杖は老人のためのものとされ、なおかつ風流で隱者のおもむきもあるとみなされている。<sup>②</sup>

六十一歳の陳確は右の詩の序文で、この藜の杖は、八十九歳以上の人が持つべきで、自分はまだ持つ資格が無い、といっている。即ち、この詩が作られた時には、まだ陳確は健康で、杖を必要としなかったということであろう。

ところが、前述の呉騫の年譜では、次に引く詩を、陳確六十一歳の年、即ち乙巳の年のこととして引用している。もし、「手足の病氣を患って三年云々」という以下の詩が六十一歳の時の作品であるならば、「まだ杖を必要としない」という「藜杖」の詩は、乙巳、即ち六十一歳以前の作としなければならないであろう。

しかし、ここでは編年のことは措いて、陳確が自らの病氣について歌っている、以下の詩を読んでいきたい。

予、手足の病三年、浸（えうや）く常に怨心无き能はざるを加ふ。故に詩を以て之を解く。

手足はもと一體、

欲する所、互ひに行持す、

如何ぞ、日に梗頑、

役使すれども、漸く随はず。

衣食、他人を須（ま）ち、

跬歩、扶攜を煩はし、

爬搔、莽にして着かず、

痛癢、祇（ただ）に自ら知るのみ。

咄なるかな、平生の恩、

一旦、相ひ乖違す。

手足、深く自ら媿（はぢ）よ、

手足もまた辭あり。

謂ふ、予、實に然る有り、

君を嗟（なげ）き、また太（はなはだ）罷（つか）る。

爾（なんぢ）聴け、且（また）日日の訛（あやまち）を、

爾、視よ、また日日の迷ひを、

爾の髪、已に盡く禿ぐ、

爾の齒、また漸く稀なり、

鼻、馨香を聞かず、

口語、故（もと）より期期。

元首、尚ほ此くの如し、

股肱、安くんぞ嗤ふに足らんや。

君、内官に諛ふ母かれ、

而して云ふ、外衛、弛（ゆるむ）と。

藏腑は、君いまだ察せず、

歴歴として、予、欺き難し。

久しく嗽し、肺、逆するを知り、

善く怒れば、肝摧（くだ）けるを悟る。

腸は枯れ、便は結澁し、

胞は虚にして、溺（いばり）淋漓たり。

膽氣、常に慄慄、腰腎、時に酸淒、

減食、脾胃弱り、

不寐、心血虧（か）く。

猶然として天君に諛ひ

獨夫、良（まこと）に悲しむべし。

一身、誰か恃むに足らん、

而して徒らに我を咎めることを爲す。

疾病、各各、由あり、

或は自ら之を取る。

哲人、命に安んずるを貴とす、

奚んぞ相怨嗟することを爲さんや。

老夫、嘿して語なく、俯首、自ら沈思す。

吾が生、曾（すなは）ち須臾、

衰強、理、齊しくし難し。

達なる者は、形骸を外（うとん）ず。

蒙莊はそれ庶幾からんか。

（予手足之病三年、寢加常不能无怨心、

故詩以解之。

手足本一體、所欲互行持、如何日梗頑、役使漸不隨。

衣食須他人、跬步煩扶攜、爬搔莽不着、痛癢祇自知。

咄哉平生恩、一旦相乖違、手足深自媿、手足亦有辭。

謂予實有然、嗟君亦太罷、爾聽且日訛、爾視且日迷、爾髮已盡  
禿、爾齒亦漸稀、鼻不聞馨香、口語故期期。

元首尚如此、股肱安足嗤。

君母諛内官、而云外衛弛、藏腑君未察、歷歷難予欺、

久嗽知肺逆、善怒悟肝摧、腸枯便結澁、胞虛溺淋漓。

膽氣常慄慄、腰腎時酸淒、減食脾胃弱、不寐心血虧。

猶然諛天君、獨夫良可悲。

一身誰足恃、而徒咎我爲。

疾病各有由、或者自取之。

哲人貴安命、奚爲相怨嗟。

老夫嘿无語、俯首自沈思。

吾生曾須臾、衰強理難齊、達者外形骸、蒙莊其庶幾。

Ⅱ『乾初先生詩集』卷三

五言古詩。換韻格で、第一の脚韻は上平四支。韻脚は持・隨・知・

辭・罷・期・嗤・欺・滴・虧・悲・爲・之・思。第二の脚韻は上平  
八齊。韻脚は攜・淒・齊。第三の脚韻は上平五微。韻脚は違・稀・  
幾。

まず、題目の意味は、「私は手足の病氣を患って三年になる。病氣  
もこう長くなると、だんだんと、この手足を怨まないではおれなく  
なる。この詩を作って、怨念を解き放ちたいと思う」、となるであろ  
う。

以下に詩の大意をたどってみる。

健康な時は手足と体とは一体のものである。しかし、一たび病氣



になると、手足が利かなくなる。衣服をつけるときも、食事をするにも、そろそろ歩くときも、他人の手足を借りなければならぬし、痒いところを搔くのも思うにまかせない。平生の恩を忘れたのか。

手足は私に背いてしまった。手足よ、自らの忘恩を恥じよ。

一方、手足には手足の言い分というものがあるようだ。手足がいうことには、以下のごとくである。

私たちは、まことに言われるとおりだ。しかし、あなたの事を心配して疲れてしまった。あなたよ、聞くがよい。あなたの日々のあやまちを。あなたよ、視るがよい。あなたの日々の迷いを。あなたは髪がすでに禿げ尽している。あなたの齒もまた、疎らだ。鼻も利かない。言葉も、以前からのとおり吃りだ。首から上の部分がこんなありさまで、どうして手足を笑えるか。あなたよ、見えないところには諂って何もいわず、目立ちやすいところにある手足にのみ欠点をあげつつはいいけない。

さらに、内臓については、あなたは何も注目していない。事は明白であるので、私達をあざむくことは出来ない。嗽（うがい）をすれば、肺気が逆流し、よく怒るので肝臓が傷んでいる。腸も弱っているので、便秘がひどい。膀胱には尿が溜りっぱなし。神経はいつもイライラ。おかげで腎臓も弱っている。食事也十分にとれないので、脾臓も胃も十分に働かない。不眠症のため、心臓も衰えている。

あなたは天君にのみ諂っているようだ。我々手足としては、まことに悲しい。身体については、先ず我々手足に頼るべきであるのに、ただただ我々を咎めるだけ。

一体に、病気になるにはそれなりの理由があるもので、時には自

ら病気を招いていることさえある。哲人ならば、天命に安んじるところを貴ぶもの。手足の病気になったからといって、病んだ手足を怨んだりはいしないものではなからうか。

老夫（「私」陳確）は黙して言い返す言葉も無い。首をうなだれて思いに沈むのみ。私の余命は長くない。身体の強健なものと、衰弱のはなはだしいものとは、考え方がちがう。体の達者な人は肉体を軽んじて精神のみを重んじがちだ。蒙莊（「莊子」）がこの典型だ。藜の杖を使用するのは、二十年くらい先のことと詩によんだ陳確は、おそらくはそれからほどなく手足が不自由になり、藜の杖を使って歩くことすらままならぬ身体になったものごとくである。

すでに見たごとく、手足の病気になって三年もたつと、段々この病んだ手足が憎らしくなってくると、陳確はこの詩の題目でいっている。題目によると、この憎らしい気持、あるいは怨念を解きほぐそうとしてこの詩を作ったといっている。この間の事情を、以下に明らかにしたいと思う。

陳確は、思想的立場、出発点として、「天」への信仰があり、その「天」が人の不幸、例えば健康や病気をもたらししているのだという儒教の一般的考えを、とらない。右に引いた詩の中ではこの考えを、「手足」に代弁させている。その言葉のうち、

「猶然として天君に諛うも、独父、まことに悲しむべし」

こそは、天の降した不運を嘆くばかりで、その不運の受け手として病状を呈した「手足」への非難に、自己の責任を転嫁してすませようとしている「元首」即ち主人、実は陳確への、厳しい批判のあらわれに外ならない。「手足」はさらにいう。

「疾病は各々由あり、或いは自らこれを取る」

と。病氣は「天」とは関わりが無く、しかるべき別の理由によって起くるのであり、多くは自らの不摂生に負うところ大であると、「手足はいつて、「元首」を戒める。

陳確は自らの「手足」の病氣を怨んだけれども、実際にはその怨みが的はずれであることを百も承知のうえで、深く自らを反省するところがあつたのである。その反省の氣持を、いわば「詩中の劇」というかたちで、「元首」を「手足」に批判させる形式をとつて、表現してみ、自らを納得させたのであるということになるであろう。これは、いわば陳確の病中の閑の、すさびの一端でもあるのであるが。

この「詩中劇」を作製し、演出して、そこから得た陳確の結論は、「衰強、理、斉（ひとし）くすべからず」というところにある。

これは、「衰」、つまり体力の衰えた者と、「強」即ち体力の盛んな者とは、健康を保つ原理が、自ら異なるであらうとする主張である。では、どう異なるのかといえば、肉体を重視するか、天の与えた「心」を重視するかという所が違ふのであると、陳確はいう。

この二つの主張の相違は、「手足」のいうところを聞き終えて、深く心に悟るところのあつた、「元首」のことばから成る、この詩の結びの二句の意味を検討することによつて、それぞれの意図するところのいくぶんかを明らかにすることが出来るであらう。そして、更に「手足」が強く非難していることばのなかの二句について検討してみなければならぬ。そのうえで、それぞれの検討した結果を照応させてみる必要がある。

そこで、先づ前者について検討を試みよう。

「達なる者は形骸を外（うと）んじ、蒙莊それちかきか。」

すでに明白なように<sup>②</sup>ここでは莊子が「形骸の内」、即ち、体の内側に存在するとされる「心」、「精神」、「道德」などを重んじる人物であると、陳確が指摘していることになるのである。しかし、莊子の主張するような立場は、達者、即ち強健な身体をそなえた人にして、初めてあつてよいこととして、陳確はいうのである。これは、実は「手足」のいうところを聞いた後、自らを深く反省して得た結論である。

つぎに後者の検討に移る。

「猶然として天君に諛い、独夫まことに悲しむべし」

これは「手足」の、「元首」、即ち陳確への強い批判の言葉である。あまりに「天君」に諛いすぎていると陳確は非難されている。「手足」から見れば、これは過つた生き方であり、この批判に應じて、その過つた生き方をした典型として陳確によつて指摘された人物が外ならぬ莊子であつたのである。

従つて、以上の二つの検討の結果を照応させると、以下のよな図式が得られる。

「形骸を外（うと）んじる人Ⅱ天君に諛う人Ⅱ莊子」

つまり、肉体を軽視し、心のみを重視する生き方は、ひたすら天に諂う生き方であるということになる。こうした考えを支えているのは、心が天に由来するものであるとする見方である。あまりに心を重視しすぎるあまり、形骸（肉体）を養うことを忘れて、ついに健康を損ねてしまった「元首」、即ち陳確こそが、この「天に諂う生き

方」をしているというわけである。

病んだ「手足」から教えられて、陳確が得た結論は、体力の衰えた今、自分のなすべきことは天にたよることではない。形骸、つまり自分の肉体を直視し、この目に見える肉体をこそいとおしみ、大切に養わなければならないということであつた。

そして又、病氣は天の降した災い、ないし不幸ではないであろうという安心である。そのことを、「手足」は、「疾病は各々、由あり、或いは自らこれを取る」と教えてくれたのであつた。

ここには、おのずから、陳確の天に対する見方が明らかにされている。即ち、天は人間に幸福や不幸を与えたりするというような意志を持つものではなく、自然的存在にすぎないのであるとする見解である。このことは又、地に対しても拡大されるべきものであり、ここに陳確の天地についての自然的認識ないし位置づけというものを、我々は知ることができるのである。

この詩の中において、陳確は自分自身の考え方の根底にあり、その思想の基底をなす考えを、病氣そのものを完全に対象化することによつて、はつきりと捉え、形成し得ているところがあるということとを、我々は確認することが出来るのである。

自らの苦しい病氣を、完全に対象化、ないしは相対化し得た陳確は、同じく手足不隨の闘病の日々の一コマを、以下のようにうたう。

#### 癸夏漫述 并ひに序

余、病みて一榻に臥するに、羣侮ももとも至り、苦、以て之を禦ぐに法なし。堂偏、竝びに二榻を設くるに、兒の榻中には一蚊もなきも、予の榻のみ、獨り蚊多し。又、毎歳、百足の虫

の困める所と爲り、常に一夜に再三至り、茲の夏十日のうち、已に三たび犯せり、兒僕、内に臥するも、皆これなし。病夫ひそかにこれを不平と爲し、漫りに此の篇を成す。

#### ○

陳子、沉疴を被り、紛然たる羣侮を納る、黨類、悉く誅すること難く、姑（しばらく）く、その尤なる者を擧ぐ。

百足は游龍の如く、花蚊は餓虎の若く、微躬には恣く毒螫、中夜、待ちて火を擧ぐ。

童子、睡夢の中、

手足、措くに所なく、

飽颺、またすでに久しく、

猶ほ復た左右を指す。

大索、得べからず、

反つて事いまだ果ならざるを疑ひ、

掲帷、癰痕を示し、

乃はち始めて大驚駭す。

性命、自ら各おの正しく、

物あれば、必らず我あり、

我、既に汝を戕（きずつけ）ず、

汝に宜しく吾は負ふこと無かるべきに、

曷爲れぞ歳に相侵し、  
再三、予を舍（ゆるさ）ざるや。

壯を捨てて老と争ひ、

乃（なんぢ）、公溥にあらざることを母かれ、

病夫、三たび自ら反り、

傷ましきかな、股肱の情なること。

（癸夏漫述并序

余病臥一榻、羣侮交至、苦无法以禦之、堂偏竝設二榻、兒榻中  
无一蚊、予榻獨多蚊、又每歳爲百足之虫所困、常一夜再三至、  
茲夏十日之内、已三犯矣、兒僕臥内皆无之、病夫微爲之不平、  
漫成此篇。

○

陳子被沉疴、紛然納羣侮、黨類難悉誅、姑舉其尤者。  
百足如游龍、花蚊若餓虎、微躬恣毒螫、中夜待舉火。  
童子睡夢中、手足措无所、飽颺亦已久、猶復指左右。  
大索不可得、反疑事未果、揭帷示癰痕、乃始大驚駭。  
性命自各正、有物必有我、我既不汝戕、汝宜無吾負、曷爲歳相  
侵、再三不予舍。

舍壯而爭老、母乃非公溥、病夫三自反、傷哉股肱情。

Ⅱ『乾初先生詩集』卷三

五言古詩。脚韻は上声七麌。韻脚は侮・虎。また脚韻は上声二十  
咍。韻脚は火・果・我・情。また脚韻は上声二十五有。韻脚は右・  
負。この詩の押韻は、このように複雑である。しかも仄韻で統一は  
されているが、そのために、詩全体に重苦しさがつきまとい、漂う。

韻律の重苦しさと、内容のユーモアに満ちた、コミカルなふんいき  
とはアンバランスであるが、このあたりも作者にとつては、計算ず  
みのことかも知れない。

手足の不随で寝たきりの身にとって苦しいのは、病氣そのものか  
らくるものだけではなかった。夏期の病床を直撃する蚊や百足（む  
かで）の与える痛手は、想像を絶する苦しさを与えたようである。

陳確はしかし、この苦しみを与える害虫をも、天によって「性命」  
を与えられた「物」として位置づける。その点、人間と同格、即ち、  
ともに性命の主体であるという点においてであるが、見なした。こ  
うして、蚊や百足を自分と対等と見なし、しかも百足に游龍、蚊に  
は餓虎等と大げさな名を奉り、その上で議論を展開する。

私はお前たちを捕えそこね、お前たちをほとんど傷つけていない。  
なのに、お前たちは夏には毎年やってきて、元気な若者には見むき  
もせず、老病で動けない私にだけ集中して攻撃を仕かけてくるでは  
ないか。なんじらよ、不公平なことをしてはいけない。それにして  
も痛ましいのは、私の一番の味方、手下であるはずの「手足」が自  
由に動かせず、対等に戦えないということだ。

というぐあいには、蚊と百足を相手として、対等の立場で、全力投  
球によつて道義論を交わしている。

ここでは、病氣も、それに加えて自らを苦しめる害虫をも完全に  
対象化し、そこには作者の巧まざるユーモアさえも漂っているとい  
わねばならない。あるいみで、おかれている惨憺たる状況を、あく  
まで冷静に処理し、対応しようとするところから生ずる、一種の余  
裕が、このユーモアの根源に息づいているもののように思われる。

それにしても、結びの一句、「傷ましいかな、股肱の情なること」には、作者をも、読者をも、手足が不随で寝たきりという現実の苦しさと悲しさに引きもどす厳しさがあることを忘れてはならない。

陳確には、以上見てきたように、病氣やそれを取りまく諸々の苦しみの種子を、ことごとく客観視し、対象化するところがあった。そのために、大ていの場合、冷静で、とり乱すことなどは、あまり無かつたのではないかと思われる。

陳確は、ではこうした冷静な目で、病身の自分の姿をどのように見たか。以下にこのことをめぐって考えてみたい。

#### 鏡を窺ふ

吾が年六十五

疴ひに臥し、七寒暑、

手足、久しく不随、

百骸、動き鎖の如し。

終歳、鏡を窺はず、

容顔、定めて駭くべし、

那んぞ知らん還（また）具體を、

奚んぞ木と土とに殊たらんや。

啞然として一笑を成し、

嚙（ひそみ）に効ふも胡ぞ予め侮らん、

本、自ら一人の身、

分かつことを繆つ、吾と汝と。安くんぞ知らん、爾、眞に非るを、

因りて悟る、我はこれ假なるを。

忽忽として百年の後、

廓然として、爾も我も去らん。

#### （一） 窺鏡

吾年六十五、臥疴七寒暑。

手足久不随、百骸動如鎖。

終歳不窺鏡、容顔定可駭、那知還具體、奚殊木與土。

啞然成一笑、効嚙胡予侮、本自一人身、繆分吾與汝。

安知爾非眞、因悟我是假。

忽忽百年後、廓然去爾我。

#### Ⅱ 『乾初先生詩集』卷三

五言古詩。押韻には意を用いるところが少ない。脚韻は上声六語。

韻脚は暑・汝。別の脚韻は上声二十疴。韻脚は鎖・我。

陳確の、手足不随の病氣は、多分、現代の医学でいえば、脳溢血ないしは脳梗塞等の障害が、後遺症として残ったものではないかと思われる。

陳確は七十四歳で死去するのであるが、この詩は、「吾が年六十五」とはじまるように、死の九年前の作品である。そうして、この年まで、「疴に臥す七寒暑」といつているように。寝たきりになって、すでに七年を経ているのである。その間の体の不自由さを、「手足久しく随はず、百骸、動き、鎖の如し」という。

こうした状況では、鏡をのぞくということが稀であるのが普通である。しかしある日、理由は明かさないが、おそらく何年ぶりかで陳確は鏡に向かう。

そこで陳確は鏡の中の自分が、あまりにも自分のいだいていたい

メーじと変化してしまっているのを見て、「啞然として一笑す」という。鏡に写っているのは、とても自分とは思えない。従って、「本はおのずから一人の身、繆つて吾と汝とに分かれる」と鏡に写った自分の像に語りかける。

この詩のなかで、陳確は意識のなかの自分を、吾・我と一人称で表現し、鏡に写っている自分の像は、汝・爾と、二人称であらわしている。こうして、陳確は二つに分裂してしまった。では、二つのうちどちらが本当の、真の自分であるのだろうか。

「安んぞ知らん、爾が真に非ることを」といい、「爾」、即ち鏡の中の自分が真でないということ、どうして自分は知るか、いや知らない、という。つまり、鏡に写っている自分の方こそ、「真」の自分であるのだとする。この判断を受けて、「因りて悟る、我はこれ假なり」と、自分のイメージのなかにある自分を「仮」と位置づけるのである。

陳確は、目に見えるもの、即ち感覚でとらえられるものに、「物」としての存在性を、強く認めるという立場に、ここでは立っていることになる。

しかし、ではイメージの中の自分が「仮」のものであるとすれば、鏡の中で、現に動いている自分が、「真実」ということになるのである。だとすると「仮」としての自分の運命は、当然はかないものであるが、では今、「真実」と判断される自分の運命は永遠のものなのであるうか。

このことについて、陳確は、「忽忽として百年の後、爾と我と廓然として去る」という。即ち、もうすぐやってくる私の死の後には、

爾も我も、きつぱりと分けへだてなく、この世を去ってしまうのだ、と断定する。

ここで述べられているように、「爾」や「我」は、即ち「仮」の自分も、真の自分も、区別なく、去ることになる場所とはどういうところであるのだろうか。いふなれば、陳確の抱いていた死後の世界のイメージが、どのようなものであつたかを、我々は以下に探ってみたいと思う。

#### 四、死後の世界

ここで我々は行論の必要上、これまでみてきた陳確の病気の詩からはなれることにする。

##### 遷居の詩

我、東に徂く、

迴龍の潭、姊氏の居、

綠竹萬竿たり。

吾の生れしより、

今に於て五たび遷る。

肇め鳳垠に居ること、

二十八年。

叔氏諸孤、

我を南に同（とも）にし、

聿（ここ）に五載に及び、

則ち其れ期（かぎり）なりと惟（おも）ふ。

諸孤、復た留むるも、

我は則ち西に於（お）る。

また十載を越し、

此の亂離に遘ふ。

鹽海に桴に乗り、

梅山に棲（すみか）を寄す、

二三年中、

寧居に遘（いとま）あらず。

卒に楊に歸するは、

吾、已むを得るに非るなり。

又、十年を越し、

實に逼して此に處る。

眞か、夢か、

流行の坎（くるしみ）やむ。

先塋に密邇し、

漸く故里に即く。

白首、何をか求めん、

兄弟母子、

朝に夕に、

吾が願ひ足れり。

（遷居詩）

我徂於東、迴龍之潭、姊氏之居、綠竹萬竿。

自吾之生、於今五遷。

肇居鳳垠、二十八年。

叔氏諸孤、同我於南、聿及五載、則惟其期。

諸孤復留、我則於西。

亦越十載、遘此亂離。

鹽海乘桴、梅山寄棲、二三年中、不遘寧居。

卒歸於楊、非吾得已。

又越十年、實逼處此。

眞耶夢耶、流行坎止。

密邇先塋、漸即故里。

白首何求、兄弟母子、朝斯夕斯、吾願足矣。

『乾初先生詩集』卷一

四言古詩。四言は、『詩經』に固有の詩形で、古風の風格を感じさせる。脚韻は、順をおって記す。下平十三覃。韻脚は潭・南。つぎの脚韻は下平一先。韻脚は遷・年。つぎの脚韻は上平四支。韻脚は期・離。つぎの脚韻は上平八齊。韻脚は西・棲。さいこの脚韻は上声四紙。韻脚は已・此・止・里・子・矣。

この詩の製作時に関しては、『乾初先生詩集』では、これを戊戌（一六五八年）に収入してある。<sup>④</sup>陳確五十四歳の時にあたる。この詩に明らかにされているように、作者は、すでにこの時まで五度の転居を経験していた。

詩中に、「卒に楊に歸し云々」とある。この「楊」の地については、以下の文章の述べるところが参考となる。

先生の生平の居、凡そ五遷、其歲月および遷る所の地、悉く詳にする能はざるも、大抵、楊橋の居に、則ち托止すること、最も久しと云ふ。（先生生平居凡五遷、其歲月及所遷之地不能悉詳、大抵楊橋之居則托止最久云。『吳騫『陳乾初先生年譜』崇禎

九年丙子)

又、

七月二十四日、老疾を以て楊橋の居に卒す。(七月二十四日、以老疾卒於楊橋之居。|| 吳騫『陳乾初先生年譜』(康熙)十六年丁巳、七十四歲)

この二つの文章の述べるところを総合して考えるとき、ここでも「楊橋」と、「遷居詩」にいうところの「楊」とは、同一の地のことである可能性が大きい。

「遷居詩」は前半の二十句と後半の十二句と、大きく二つに段落が分かれる。

前半二十句、即ち「我、東に徂く寧居に遑(いとま)あらず」の部分では、四度にもわたる転居のあわただしさを歌う。このことは、脚韻のあり方によっても、よくわかるのである。目まぐるしく換韻されていることによつて、おちつかない、あわただしさともいうような雰囲気醸し出されているのである。

後半、即ち「卒に楊に帰する朝に夕に、吾が願ひ足れり」は、前半と違って、高揚する、喜びに満ちている。この後半部分は前半と異なつて押韻も一韻到底となる。仄韻ながら、上声四紙により統一されており、これによつて作者陳確の放浪に近い生活から、定居を得た歓喜の情が、高らかに、湧き上る様に歌いつづけられているのがよくわかる。

では、「楊」に、なぜ定居したのか、そのことが何ゆえにこのように喜ばしいのか、その秘密はどこにあるのであろうか。

このことについては、詩の後半部の以下の記述が、我々に答えを

与えてくれるであろう。即ち、「先塋に密爾し、漸く故里に即く」といつている。楊ないしは楊橋と呼ばれるこの地が、「先祖の墓地に近い」ということが、流浪してやまない、しかも病気がちの陳確の足をここに止めさせ、おちつきと、心からの喜びとを与えたものの如くである。

すでに見てきたとおり、その一生のなかで、ほとんどの時期、病氣と縁の切れることの無かつた陳確のことである。当然のこととして死の問題は念頭をはなれることは無かつたであろう。

例えば前章で「窺鏡」の詩を読んだが、「真」實在の鏡に写っている自分、「仮」實在としての自らのイメージの中の自分、これらは存在という観点からすれば、「真」と「仮」との差があり、その重さには厳然たる相違があるはずのものであろう。

それにもかかわらず、陳確は「百年の後」即ち死後には、「仮」は当然としても、「真」實在も、共に去るのであると言っていた。陳確は、死後、去つて行くべきところを、ずっと探しつつけていたのであろう。五度の「遷居」も、そのことと無関係ではあり得ない。このたび、楊の地に移つて、祖先の墓地に「密爾」、即ち近接して住んでみると、まるで祖先や、すでに死んだ肉親たちと憩いあつていくかのような心の安らぎを得て、その喜びを陳確はかくしきれず、高らかに歌つたのにちがいない。この世を去つて、行くべき場所が、祖先の墓地であるという思いが、心の中にしっかりと固定されたのも、この時であろう。

陳確にとつて、死後に去るべき所としての漠然とした心象が、「楊」の地に移るにおよんで、かなりの程度にはつきりとして来て、ほと



んど形象化されるのに近いところまで至ったのではないかと思われる。この間の変化、ないしは進展の核のところにあるのは、いうまでもなく「先塋」、即ち祖先の墓地であつたであろう。

おわりに

陳確の一生は苦しみに満ちていた。政治的苦勞（明王朝の滅亡と科挙受験断念）、経済的苦勞（学を排し、母に仕えながらの帰農による生活苦）、精神的肉体的苦勞（師友、肉親の死や、自らの病苦）と限りがない。

こうした苦しみに追い立てられるようにして陳確は五度も転居をくりかえし、祖先の墓地に近い「楊」、即ち「楊橋」<sup>⑧</sup>にたどりついて安心を得ておちついた。

すでに見てきたように、陳確の精神は苦難によつて鍛えられ、研ぎ澄まされ、少々のことでは動じなくなり、例えば病氣なら、それを完全に対象化してとらえられるようになっていた。こうした認識の構造をもつて、陳確は現実を見る。例えば、自分のイメージのなかの自分がある。一方で鏡に写った病氣やつれのした自分がある。

すでに第三章で見たごとく（「窺鏡」の詩）、こうしたとき、陳確は迷わず、前者を「仮」、後者を「真」と判断する。しかし、「仮」も「真」も、死の前には等しく、現実から去らねばならないと陳確はいう。

してみると、死ということを考えるとき、この世のことはすべて「仮」であり、死のむこうにこそ、より高い次元での「真」があるにちがいないと、陳確は考えたのではなからうか。

現実の存在の世界は、万物が一しなみに「仮」で、死後の世界をかえって「真」と見る見方に陳確は傾いていたと推知することも許されるであろうが、陳確が祖先の墓地に接近して住むことに大きな安らぎを覚えるに至った理由も、一にここにあると考えてよい。「真」の世界が、身近に近づいた思いであつたのであろうからである。

このように、陳確が「真」の世界に深くかわるもの、あるいは場所として考えている墓地は、では、一体どのようなものであるべきものとして想像され、とらえられていたのであろうか。「真」の世界に対する陳確の心像の一端にふれるべく、以下の詩に目をおして、この稿をとじることにした。

龍竹の墳に桂を看、祝二陶兄弟に呈す。

龍竹、山深く、路（みち）逶迤、

桂香、松影、綠垂垂。

碑殘するも、未だ前朝の字は蝕ばまれず、

墓老、還（また）百世の師たるに堪ゆ。

烈祖の風流、仰止を餘（あま）し、

元孫の忠節、悲思を動かす。

嗣音、更に君兄弟あり、

鴻羽翩翩として、並びに儀とすべし。

（龍竹墳看桂呈祝二陶兄弟

龍竹山深路逶迤

桂香松影綠垂垂

碑殘未蝕前朝字

墓老還堪百世師

烈祖風流餘仰止。  
元孫忠節動悲思。  
嗣音更有君兄弟。  
鴻羽翩翩並可儀。

Ⅱ『乾初先生詩集』卷八

七言律詩。この詩は、今体詩の平仄にかかわる規則のうち、二四不同・二六対・粘法・下三連・孤平・孤仄・護腰については完璧に守っており、律詩に求められる形式としての、対句・押韻もきちんと備えているので、ほぼ正体と見なしてもよい。しかし、ただ一箇所、二句の六字目が「反法」<sup>⑨</sup>の規則に反している。そのため、厳密に言えばこれは拗体である。ただし、型にはまることを避け、大家は意識して、少しばかりの規則をはずし、その変化を楽しむ風もある。拗体が必ずしも瑕とはされないゆえんである。押韻は一韻到底格。上平四支。韻脚は迤・垂・師・思・儀。引用の原文に平○、仄●、押韻◎を付しておく。

この詩は自縊によって早逝した同門の友人、祝開美<sup>⑩</sup>の墓参に際しての感慨を記したものである。この詩には陳確の自注が二ヶ所（四句と六句）に施されている。

祝靜菴先生より而（い）下、三世、並びに周禮の族葬に依るⅡ  
四句

吾友、開美を恫（いた）むⅡ六句

わざわざ自注を施しているのは、作者として、ある感慨を強調しようとする意図があるのであろう。ここでは前者（四句の自注）に注目したい。

自注の付されている第四句は、「この墓はだんだん古びてゆく。しかし何百年の後といえども、人々に尊い教えを教えつづけ、人生の師としてありつづけるであろう」という。ここに付された陳確の自注は、本文の、この「尊い教え」とは何かということを、明らかにするためのものと見てよい。

陳確が墓参に訪れたこの墓地は、祝開美と、その父、その祖父の三代が同一の墓域に、ある秩序に従って葬られている。

こうした墓地のあり方を、陳確は『周礼』の族葬の定め<sup>⑪</sup>に則ったものである」と、自注を加えて述べている。この祝家の墓地こそは、人々に永く族葬の尊さを教えつづけてくれるものと、陳確は深く信じてやまない。

陳確の生きた時代は、明末清初の、生きることの難かしい乱世であった。すでに見てきたように、経済も治安も定まらず、人は死んでも葬られることが難かしく、一たび近くの銭塘江及びその支流が氾濫すれば、未だ葬られないままの数限りない棺桶が一度に流失し、遠く海へと浮かび去る。一度大火がおれば、それらは灰燼に帰す。陳確は少年のころからこうした痛ましい光景を、幾度目のあたりにしたか知れない<sup>⑫</sup>。

ひるがえってここに引いた詩の、族葬による祝家の墓地の雰囲気は、まさに別天地である。このさまを、陳確はうたう。

「龍竹山の山ふところ、路は遙か。どこからともなく木犀の香りが漂って来、松の緑がしたたるよう」

と。  
龍竹山の山ふところ、道をたどって行くと、馥郁たる木犀<sup>⑬</sup>の香り

がどこからともなく漂い、松の緑がしたたるような一角にたどりつく。ここに祝家の人々は、代々秩序正しく、安らかに眠っている。

陳確はさまざまな苦しみのなか、わけても激しい病苦の呻吟の日々を通して、矛盾に満ちた現実世界を、仮のものと見なすようになった。そして死後の世界、それはあるいみで否定された現実世界の、その先にあるであろう世界のことであるが、そこを「真」の世界として心に思えがき、ひたすら憧れていた。陳確が心におもいえがいていた世界は、まさにこの詩の祝家の族葬墓地に象徴されるような、秩序正しく、静かで、安らぎに満ちた世界であったのであろう。

ちなみに、陳確の年譜の作者、呉騫は、陳確の逝去のことを述べたあとに、「沈家石橋の西の、祖先からの墓地に、秩序正しく葬られる<sup>④</sup>」と記している。

## 注

- ① 医術、医道。医書、医療処方Ⅱ一九九七年、上海、漢語大詞典出版社、『漢語大詞典』。
- ② 脂肪分の多い肉と、米の食事。贅沢な食事。
- ③ 何謂人情、喜怒哀懼愛惡欲、七者弗學而能、……故聖人之所以治七情、……Ⅱ『禮記』禮運。
- ④ 「指内心的激動或忿怒等情緒」。又いう「中医学指人体的内熱。常表現爲五心煩熱、咽干、口燥、口舌生瘡等症。中医有心在地爲火之說、故称」Ⅱ『漢語大詞典』。ここでは後者を指すと見てよいであらう。

- ⑤ 詩の原文は「不虞豈通言」。「不虞」については、前掲『漢語大詞典』で、「意料不到」あるいは「指意料不到的事」という説明があてはまるであらう。即ち、思いがけない不幸、病氣などを指す。「通言」については、同じく『漢語大詞典』では、「通達的言論」と説明するものが、あたるであらう。即ち「明白な意味を持つ言論、ないしは言葉」と、とってよいであらう。
- ⑥ 案先生曾姪孫採孝錄先生詩、編年於是歲始。  
Ⅱ呉騫『陳乾初先生年譜』、大清順治三年丙戌の項の注。
- ⑦ 「孟云」の「孟」については不明。ちなみに孟軻の『孟子』には、この文章は無い。
- ⑧ 看Ⅱ聴見Ⅱ『漢語大詞典』。なお、聴見は「耳に入る」、「耳にする」、「聞きつける」という意味。
- ⑨ 注⑥参照。
- ⑩ 『乾初先生詩集』巻一、「乾初先生詩集小傳」に注があり、「作者陳採孝、係陳確之從曾孫」という。
- ⑪ 「聞上生家亦被盜簡寄一首」・「新政」・「丁亥正月二十雪」Ⅱ以上『詩集』巻二。「世事篇寄丁兩表兄」Ⅱ『詩集』巻四。
- ⑫ すでに明らかなように、年譜の呉騫の文章は「先生中七鐵尺」となっている。どちらが正しいかについては、決しがたい。
- ⑬ 瘡については、例えば『辭海』合訂本（一九四七年、中華書局）では、以下のとおり。「病名(Malaria)、譯名麻刺利亞、又名間歇熱、按時而發之寒熱病也、病原體爲瘧蟲、由瘧蚊傳入人體而起、病狀爲先寒後熱、汗出乃解、此後按時發作……」
- ⑭ 百Ⅱ凡、一切、完全。『詩、邶風、雄雉』、「百爾君子、不知德行」(『漢語大詞典』)
- ⑮ 三蟲又の名三尸。道教の説で、体中に住む三匹の害虫。体内でさまざまな

病気を引きおこす。庚申の夜には体内から出て、天帝に宿主の秘事、悪事を告発するといわれる。

- ⑮ すでに注⑬でも明らかのように、マラリアの病状には寒熱の両方の発作が特徴であるようで、陳確がここである「寒」は、「熱」の方もふくめていつているものである。なお、「熱」については、同じく陳確の詩「間日瘧」を参照のこと。

- ⑯ 旧時官府用朱筆写的傳票Ⅱ『漢語大詞典』。

- ⑰ 旧時官署緊急拘傳人犯の一種簽牌Ⅱ『漢語大詞典』。

- ⑱ 一般に「書云」というときは『書経』からの引用を指すことが多いが、現行の『書経』には該当する文章は見あたらない。

- ⑲ 『乾初先生詩集』巻三。

- ⑳ 例えば、『辭海』には、「藜杖」の説明として以下のような文を引く。

魏帝嘗賜景帝春服、帝以賜濤、又以母老、并藜杖一枚Ⅱ『晉書』山濤傳。悠然策藜杖、歸向桃花源Ⅱ『王右丞詩集』卷十三、「口號又示裴迪」。

- ㉑ 形骸之外。肉体の外。心が内であるのに対して外にある肉体をいう。〔莊・德充符〕今子与我、遊於形骸之内、而子索我形骸之外、不亦過乎Ⅱ角川『新字源』。

- ㉒ 前注㉑参照。

- ㉓ 『陳確集』（中華書局）所収「詩集」卷一、四言古詩「遷去詩」の題注に、

「璋案、薑畦族父採孝輯公編年詩、此入戊戌」という。

- ㉔ 口語訳、「ついに楊に身を寄せることになったのは、私が他の地への転居に、全く意欲を無くしたからではない」。

- ㉕ 「上声」が実際にはどのような音として耳にひびき、聞こえ、印象を与えるのかということについては、例えば空海はその著『文鏡秘府論』天巻・四聲論のなかで、沈約が甄公の論に答えた言葉として、「夏草木茂盛、炎熾

如火、即上聲之象」（夏は草木が生いしげり、熱気が火のように燃えあがるが、これらが上声のありさまをよくあらわしている）と引用し、述べている。

- ㉖ 口語訳、「祖先の墓地に接近しており、やっと“ふるさと”へ帰って来たという気がする」。

- ㉗ 現在の浙江省、海寧市内。錢塘江の最下流の北岸。

- ㉘ 奇数句から偶数句に移る時、二字目、四字目、六字目が、前後の句で、それぞれ平仄が逆になるという規則。

- ㉙ 『陳確集』文集卷十二に、「祝子開美傳」を収める。

- ㉚ 墓大夫、掌凡邦墓之地域、爲之圖、令國民族葬、……正其位Ⅱ『周禮』春官、墓大夫。ここに鄭玄は、以下のような注を加えた。「凡邦中之墓地、萬民所葬地、族葬、各從親、位謂昭穆也」と。

「族葬」とは、『周礼』では、国家公有の墓地に、役人が人民に各々の家の墓地を区画して与え、そこに一族が秩序正しく葬られる制度のことである。一方、陳確のいう「族葬」は、政府の手を累わすこと無く、人民が各自で私有の墓地を求め、そこに一族を秩序正しく葬ることをいう。

陳確の「族葬」についての説と、その秩序正しい葬り方の図、即ち「族葬図」とは、彼の著書『葬書』に収められている。今、『葬書』は『陳確集』（一九七九年、中華書局出版）巻六、巻七において、その全容を見ることが出来る。

なお、ここでしばしば言及する族葬墓の秩序については、以下のごとくである。中央に一ばん年代の古い先祖、その左側に縦一列に二世以下、偶数世代が並んで葬られ、これを「昭」という。反対に、右側に縦一列に三世以下、奇数世代が並んで葬られる。これを「穆」という。このことについては、『周礼』小宗伯に記載されている。

③② 『葬書』巻頭の「葬論」参照。

③③ 木名、通称桂花、亦称金桂、丹桂、爲珍貴的觀賞樹。木犀科、常緑灌木或小喬木。秋季開花、花簇生于葉腋、黄色或白色、極芳香、……『漢語大詞典』。

③④ (康熙)十六年丁巳、七十四歳、七月二十四日、以老疾卒於楊橋之居、其年冬、葬沈家石橋西祖塋之次穆。

なお、陳確は仏教について、以下のように述べている。

「蓋陰陽消長、時運常、譬之晝作夜息自然之理、然人病則恆晝臥、或夜更不臥、酒之徒、俾晝作夜、何可憑準、今中國之奉佛、正如病與醉人之晝臥耳」『陳確集』別集卷三、「佛道」。

陳確は寺にもしばしば遊び、僧とも交友があつた。このことは、詩や文章のなかに、多くそのあとをとどめている。これらを読んでもみると、陳確は寺の閑寂さと、僧の人格の高さとは、深く親しみ、心をひかれていた。けれども、仏教の教義となると、陽明学との近似性からか、禪宗のそれに、わずかに興味を示しているぐらいである。こうしたことを総合すると、仏教への信仰ということになると、ついに無かつたというべきであろう。陳確の心象世界に、仏教の影は、はなはだ希薄であり、あるいは無いといつても過言ではないかも知れない。